■ 地域発見講座

第1講　テーマ　白洲正子と歩く甲賀路　～かくれ里・近江山河抄より～　　（会場：土山森林文化ホール）

開講式後、「紙ふうせん」による『大人のおはなし会』があり、今回もストーリーテリングで3題が披露されました。事前練習や集中力が必要とされる発表に、受講生一同驚きと賞賛の眼で聞き入っておられました。

そして、いかい先生による記念講演。白洲正子の眼では甲賀がどのように映り、どのように表現されるのか、ここに大きな期待が寄せられました。「もっともっと実例を挙げてほしかった」との意見があったほか、「身近な地名ばかりが出てきて話に引き込まれた」「私たちの生まれ育った地がこんなにも由緒あるところだったのか」「この1年で新しい生きがいが見つけられそう」等の声が寄せられました。受講生の感想は多方面にわたり、終戦時も日本人の誇りを失わなかった正子の夫白洲次郎、近江を詠んだ芭蕉、文学の世界に誘ってくださった自分の恩師先生のことにまで思いは広がり、学びのモチベーションを高めるにふさわしい第1講となりました。

■ 地域発見講座

第2講　テーマ　阿弥陀如来拝観と交流会　　（会場：十楽寺・山中公民館）

国道1号線鈴鹿隧道手前、摩耶夫人（お釈迦様の母）立像で有名な十楽寺。伽藍は織田信長氏により没収、一時消滅しましたが、仏像は村人の努力により無事護られました。そして1661年、広誉可厭大和尚（こうよかえんだいおしょう）の尽力により、万人講を募り、本堂・庫裡等が再建されました。ご本尊は日本最大級の「丈六阿弥陀如来様」。浄土宗総本山知恩院直轄の末寺として今日に至っています。

こんな激動の時代を生き抜いた十楽寺様を会場として、第2講は開催されました。講座日誌には、「丈六のご本尊様の大きさにびっくり」「当時の人々の信仰の深さに感動」「お釈迦様の教えについて、改めて学ぶことができた」「摩耶夫人のお話はなかなか外では聞けない」、「これまでの自分の人生を反省した」等の感想のほか、「『人生は、安心と心配の繰り返し』『動けるときに動き、頭は使えるときにつかう』の言葉が印象に残った」等、住職様の法話に、受講生一同、自らの生き様を改めて見つめ直すいい機会になりました。

また、この日は、山中区様のご協力を得て、区公民館にて、地元名物「蟹が坂飴とお茶」で受講生間の「交流会」をもちました。

■ 地域発見講座

第3講　テーマ　甲賀のあけぼの　　～甲賀の地形・地層～　　（会場：みなくち子どもの森）

あることは知っているけれど・・・、受講生の皆さん多分このような状況ではないかとの判断から 、今回は、みなくち子どもの森にて開催。予想通り初来館者多数。もうこれだけで地域発見講座の目的は一部達成。

館長の小西講師は、子どもの森の概要説明の後、 230 万年前の水口のようすを見つかった化石から実証的に解説されました。その後、当時の地層（古琵琶湖層群）が露出している地点まで徒歩で移動し、火山灰と泥が交互に堆積している現場で学習。最後は展示館にて学習のまとめをし、太古の昔に思いを馳せることができました　.

講座日誌には、「地域密着型の学習で、甲賀の成り立ちがよくわかった」「水口に象やワニがいたことが印象に残った」「今まで関心のなかった地質学に少し興味が湧いてきた」「このようないい施設があること、学んだことを広めたい」「孫と一緒にまた来たい」など、好評を得る講座となりました。

また同日いただいたオールカラー刷りの「みなくち子どもの森自然観察資料集」を見て、甲賀の動植物についての講座開設を期待する声も聞かれました。

300～170 万年前の地層

■ 体験的学習講座

第４講　テーマ「　平山郁夫とシルクロード、佐藤忠良と樂吉左衛門の世界」　（会場：佐川美術館）

仏教伝来やシルクロードをテーマに掲げ、世界各地を巡られた画家平山郁夫氏と子どもや女性をモデルに、常に温かなまなざしで人間を見続けてこられた彫刻家佐藤忠良氏、そして、斬新な感性を発揮し、「手捏ね（てごね）」にこだわられた樂吉左衛門氏の作品を鑑賞。この三大巨匠と 館自体が一つの大きなアートである佐川美術館、まさにアートづくしの中で第4講座開講。課題は、「美術への関心を高め、自らの文化性をどう高めていくか」。

講座記録には、「作品に込められた作者の主張や願いを解説していただき、今まで馴染みのなかった美術鑑賞に興味をもった」「制作者のバックグランドを知って鑑賞させていただくと作品への親近感が湧く」「美術作品の見方や目のつけどころの理解が進んだ」「画材・建材にも目が向き、鑑賞の幅が広がった」などが記され、講座の成果が記録の随所に表われていました。「館の展示計画を見落とさないように注意し、今後も足を運びたい」など、本講座は、一人ひとりの芸術へのスタイル・スタンスが形づけられる契機にもなりました。

わかり易い講義とすばらしい会場、整理の行き届いた資料を提供してくださった佐川美術館様に深甚なる御礼を申しあげたいと存じます。

井上学芸員による講義

第５講　テーマ「ストレッチ運動」　（会場：甲賀健康医療専門学校）

会場は Ｈ４創立 ルネス学園。人間が生きるための最も重要なのが健康。このコンセプトのもと、健康の維持増進のために、医療とスポーツの両分野からアプローチを行っている甲賀健康医療専門学校。受け入れ対象は高卒以上。地元の学校・医療機関でありながら、足を運ぶ機会はあまりなく、今回の講座で初めて学校を知った方も多数。講義はストレッチ運動、筋力アップトレーニングの重要性が述べられた後、時間の大半をストレッチ運動の実技に費やされました。特徴は、①体のどの部位に効果を及ぼすのかを詳しく解説されたこと、②ゆっくりとしたスピード、座位・立位をバランスよく組み込まれたこと、③いつでもどこでもできる内容であったことで、受講生の年齢を考慮した内容となっていました。講座後、質問・意見が多数出て、講師先生や学校スタッフの皆さんが驚いておられました。健康に対する意識の高さを改めて感じる講座でした。

井上講師

第６講　テーマ「レザークラフト」「オリジナル陶板づくり」　＜選択講座＞　（会場：信楽高等学校）

今回の講座の特徴は、初めての試みとなった選択講座。講師先生の都合、準備ができる部屋のキャパシティー、実習に必要な用具の数など、いろんな条件を協議し、午前が皮のコースターづくり、午後が陶板づくりとなりました。7月に受講生の希望調査実施。結果、レザーに希望が偏ったため電話にて調整。やはり実習はインパクトが強く、「牛の１枚皮におどろき」「粘土の自在制に少し感動」、「まちおこしの姿が垣間見えた」、創作活動については、「難しかった」「自分のデザイン力不足を痛感」「時間不足」「講師先生の丁寧な指導が嬉しかった」「終わってみればとても楽しかった」という感想が多数寄せられました。

レザーの作品は同日に持ち帰り可。陶板は乾燥・素焼（800℃）・本焼（1250℃）を経て完成となるため、手元に届くのは10月頃になる予定です。希望を叶えてくださいました信楽高校指導スタッフ一同様に厚くお礼を申しあげたいと思います。

山崎講師

杉村講師

上・レザークラフト
下・陶板づくり

■ 理論学習講座

第 7 講　テーマ「これからの人生設計と家計管理」　（会場：立命館大学）

江畑講師

ファイナンシャルプランナー江畑講師によるマネー講座。日常の生活に直結するテーマであり、受講生の関心はいやが上にも高まりました。準備していただいた資料はワークシート形式になっており、講義に集中できるしかけがありました。特に、昨年度のマネー基礎講座「よくわかる金融政策」を受けられた方にとっては、社会の金融状況（日銀と市中銀行の関係）と自分の経済生活とを結びつけ、セカンドライフのありようを考えるいい機会になったのではないでしょうか。受講生の記録には、「定年退職直後。いいタイミングでの講座だった」「今まで私はザル生活。家計簿をつけねば」「『人生終わりよければすべてよし』『過ぎたことは忘れてよい』が印象に残った」など感謝のコメント多数。わかり易い講座でした。

第8講　テーマ「今、源氏物語がおもしろい」　（会場：立命館大学）

昨年度、開講式後の記念講演として開催。人気を博したので今年度もその続編を依頼。講座は、①源氏物語が色々な辞書にどのように定義づけられているか、②源氏物語がたどった歴史、③源氏物語をどう表現するかの順で展開され、桐壺巻と若紫の巻の一部を現代語訳する演習がありました。

受講生からは、「全部で54巻もあることに驚いた」「訳された方の感性や考え方がそれぞれの作品から読み取れる」」「訳は難しかったが、講義の進行とともに古典への興味が湧き、理解が進んだ」「読み比べが楽しかった」の反応のほか、「男性の訳者は、若紫を理想の女性像として捉え、女性は、若紫に反感のようなものを感じていると思う」「女性は、若紫に主体性がないと感じているのではないか」などの分析をされる方、また、「いろいろな価値観を持った人がいるので、柔らかい心をもたねばならない」など、自らの問題に置き換えて思考を巡らせる方もありました。受講生の皆さん一様に、もっと源氏物語を読んでみたいとの感想を抱かれたようでした。

須藤　講師

第9講　テーマ「運動機能の評価と介護予防に向けた運動療法」　（会場立命館大学）

3.5秒に１人、どこかで誰かが転んでいる。このデータをもとに、「ひとはなぜ転倒するのか」を一つの研究課題に掲げておられるスポーツ健康科学部の藤本講師による第９講。バランスのバイオメカニクス（生体力学）を述べられた後、加齢に伴って低下する筋力・持久力と転倒や介護リスクを詳細なデータをもとに解説されました。

その後、握力・下肢筋力・柔軟性・バランス能力・移動や歩行能力の測定がありました。衝撃的であったのは、「歩行速度と平均余命」との関係データ。受講生の記録には、「歩行速度で余命がわかる。今まで考えなかった。面白かった」「体力の衰えが今日の測定によりはっきり数値化された」「普段から姿勢に注意して歩くことが大事」「トレーニングの方法もお話していただいたので、家で少しでも実践したい」等、今日の講座でウォーキングをはじめ、各種トレーニングの重要性がはっきりと共通理解できました。また、第５講と合せた総合トレーニングのモデルプランがほしいとの声もありました。

第10講　テーマ「サルコペニア・ロコモティブシンドロームについて」　（会場：立命館大学）

立命館大学健康科学部講師による、健康づくり講座第２回目。専門用語の並ぶテーマではありましたが、受講生は、データを交えたその意味の解説に集中力を発揮されました。加齢による筋肉量の減少をサルコペニアといい、運動器の障害のために移動機能の低下をきたした状態を略称ロコモという。これが転倒に繋がり、最終的には要介護となる。人間誰しも健康上問題がない状態で日常生活を送り、最期を迎えたい。これを健康寿命というが、この延伸のため何を心がければ良いのか。

本講座は、このテーマに科学的に迫っていただきました。受講日誌には、「日常生活の中に運動をうまく組み込んでいく『ながら生活』が大事」「ビタミンD摂取とトレーニングをセットにした日常を送る」「理想は、最期まで自分でできて、苦しまずに死に至ること」…が記され、「自分なりの健康維持法を見つけ実践する」、この気持ちが大いに高まる日となりました。

第11講　テーマ「土砂災害のおそろしさ」　（会場：立命館大学）

土石流、地すべり、斜面崩壊（がけ崩れ）を学習。山腹や川底の土砂が、大量の水と交じり合って津波のように襲ってくるのが土石流、地下水が粘土のような滑りやすい層に浸透し、異なる層の影響で地下水のたまりやすい箇所ができ、そこから上の地面が浮き上がって滑り出すのが地すべり、斜面崩壊は斜面が突然崩れ落ちる災害をいう。そして、それぞれの発生メカニズムを図形化して解説されました。

後半は、土砂災害予防のための「森林の機能」についてお話がありました。土砂災害予防のためには、森林整備が必要ではあるが、それだけで十分とはいえない。ハード対策（ダム）による危険レベルの低下策も必要になることを強調されました。

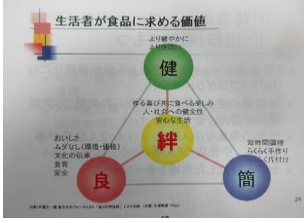
受講生は、土石流の動画や崩落・被害の状況写真を見て、その恐ろしさを再認識されました。そして、講座記録には、「データに基づいた講義で分かりやすかった」「土砂災害増加の昨今、タイムリーな講義であった」「森林整備の重要性と森林の力だけでは土砂災害は防げない」「コンクリートダムの必要性につき考えさせられた」…との感想が記されました。

第12講　テーマ「作る楽しさ　造る面白さ　創る醍醐味」　（会場：るシオールファーム）

第六次産業最前線からの報告は（有）るシオールファーム。前半は、創設時からの歩みを DVD にて紹介、後半は PP 資料にて生産から販売までの現状を解説。若者の「親の世代とは一味違った農業経営をしたい」との意欲をうまく取り込み、農作業受託共同事業を開始。水稲請負耕作組合を経て、平成6年、（有）るシオールファーム設立。平成10年には（有）共同ファームを立ち上げ、転作地の期間借地、作業請負を手がける。その後、中日・毎日新聞優秀賞、玉ねぎドレッシングモンドセレクション連続金賞受賞等、数々の賞を受け現在に至っています。社の方針は、①安心・安全な農作物の供給、②流通事情を迅速にとらえた新規品目の導入であり、運営のコンセプトは、徹底した作業効率の追求です。受講生は、常に勇気と向上心を持って経営にあたる若者の姿に圧倒され、また、甲賀にたのもしさを感じながら講義に聞き入っておられました。講座の最後は、ファームのお店で、野菜や果物、調味料のお買い物に夢中でした。研修会場を提供してくださいました植区様ありがとうございました。

第13講　テーマ「農と地域の未来を拓く」 ～6次産業化とフードツーリズムを中心に～ （会場：立命館大学）

前半は、6次産業化学習の着実なステップアップを図っていただきました。講座は、①6次産業とは何か、②なぜ6次産業化が必要なのか、③6次産業化を進めるにはどうしたらよいかの展開でした。本年度は③に力点がおかれ、「付加価値化を図っていくという生産者視点からの6次産業化では不十分で、世帯の急激な少人数化に代表される消費者の変化、いわゆるセグメント化（消費者を区分すること）した市場をターゲットにし、需要サイドからの発想でマーケティングを進めていかねばならない」との指摘は学習の流れの中でとても新鮮に聞こえました。



後半はフードツーリズム。これは、食と観光をセットにした概念で、地域ならではの食・食文化を楽しむことを目的とした旅。類型化が図られ、全国各地の事例を紹介していただきました。①地域特産物の多くは少量多品目、季節性（旬）をもつ。これを強みとする。②人は食に何を求めるか。カロリー、栄養だけではない。食に込められた「物語性」と「体験」が重要。現場で6次産業を学んできた私たちもスカッとした気持ちになりました。

第14講　体験的学習講座4　テーマ「秋・冬の草花の寄せ植え」　（会場：県立甲南高校・高等養護学校）

体験的学習講座最終回。今回の講師は甲賀をこよなく愛してくださっている野坂先生。今年度14回目の講座。カレッジスタッフにも、もう開講土曜日が待ち遠しいといった雰囲気が漂っています。開門時刻のかなり前から集合していただき、仕事の役割分担待ち。このような空気の中で前半の講義が農場の建物2階ではじまりました。寄せ植えをする時の基本的な手順、留意点などの指導が約30分ほどあり、その後、農場の畑へ移動。好みの葉牡丹を受講生一人ひとりが直接土から抜き、手にした後、ハウス内の花ポット5種を選ぶ。各人の選ぶ基準は、今の美しさを求める人、将来花が咲き、その時の美しさを楽しみにする人の2態。農園で用意していただいた土を竹筒で入れ配置を調整し完成。同じ鉢、同じ花の寄せ植えでしたが、やはり仕上がりは様々です。再度講義室に戻り、水や肥料のやり方、花がらのつみ方を学びました。今回のお話で知ったことは、①土を押さえつけない、②ウォータースペース確保、③肥料をやるタイミングは周りの雑草より色が薄くなったら等々、すぐに役立つことばかりでした。受講生の記録には、「フォーカスポイントを考え、ロゴを添えることにより美しさがより引き立つの言葉が印象に残った」「家でも今、寄せ植えをしている。学んだことを即生かしたい」「聞きたいことはまだまだあります」など、積極的な姿勢が見られました。

野坂講師

第15講　テーマ 「超高齢化社会とまちづくり」　会場：立命館大学BKC

黒川講師

修了書授与

「 Creating a Future, Beyond Borders －自分を超える、未来をつくる－」とのキャッチフレーズを掲げられた今年度の最終講資料。この日の副題は、「タイ東北地方の高齢化社会のもとでの新たなエコツーリズムへの挑戦」。経済学部黒川教授は、自ら関わられたタイ王国コンケン県やラオスでの「一村一品運動」の事例を取り上げられ、超高齢社会下のまちづくりや自分づくりの視点を明快に示されました。タイの「足るを知る経済」、私たちは言葉としての理解にとどまってます。今後は、自らのスキーマ（＝自らの認識・判断をする時の共通して現れる思考の枠組み・知識の集まり）に気付き乗り越え、新しい行動パターンや態度の形成が求められます。この日は、こころ豊かに生きるとはどういうことかや豊かな老後を実現するヒントをご講義いただき、これまでの講座を繋ぎ、今年度の学びを確かなものとしてくださいました。

閉講式

この日の講座日誌。「自分本位の日本人に対し、他人のために働きたいのタイ人。恥ずかしい限り」「海外では老人が活躍しておられることを知った。自分にまだ期待できる」「タイでは互いを認める社会が実現できている。私に何ができるかを考える時期だ」「タイの高齢者に元気をもらった。いつまでも社会と繋がって生きたい」「タイでは、自分を大切にし、自信を持って生きている。経済的な豊かさと幸福とは必ずしも一致しない」」「黒川教授の講演を市内各集落でできないか」ほか、1年間のお礼など多数の感想や意見をいただきました。

また、この日は講座の後、閉講式が行われ、山下学長より27名の方に修了証書が授与されました。15回にも及ぶ連続講座を支えてくださった受講生、運営スタッフ、実行委員ほか関係役員様、1年間誠にありがとうございました。

（第2回交流会）「講座の振返りとおすすめスポットの紹介」

補講1. テーマ 「文学と表現の自由 ―「谷崎潤一郎の現代語訳「源氏物語」と「細雪」を中心に」 会場：京都キャンパスプラザ

まずは、谷崎潤一郎の生涯と文学。1886年（M19）東京日本橋生まれ。24歳でデビューし異文化に傾倒。前半生37歳までに、「刺青」「痴人愛」…を発表。いずれも、一部修正・削除あるいは発禁の憂き目に遭っている。映画制作にも関与するが、上映禁止などの処分を受ける。79歳までの後半生では、1923年に関東大震災に遭い関西へ移住。この頃から氏は日本文化へ回帰。「谷崎訳源氏物語」「細雪」「A夫人の手紙」「夢の浮橋」を発表するも陸軍や占領軍から掲載中止の干渉。この日の講座は、その後、どのような表現が削除・修正となったのかを原文と照らし合わせながら講義が進められました。

谷崎氏は、「細雪」の回顧（1948）の中でこう述べている。”当時すでに太平洋の戦局は我に不利なる徴候を見せ、軍当局はその焦慮を露骨に国内の統制に向けはじめてゐたことであるから、全く予期されぬことではなかったが、（…）ことは単に発表の見込みが立たなくなったと云ふにつきるものではない。文筆家の自由な創作活動が或る権威によって強制的に封ぜられ、これに対して一言半句の抗議ができないばかりか、これを是認しないまでも、深くあやしみもしないと云う一般の風潮が強く私を圧迫した。”

この日、参加された有志16名の方はスケールの大きな講座に感嘆の声を上げておられました。「自分ではなかなか見つけられないので、このような情報をもっと発信してほしい」「来年度もまた来たい」「こちらに乗り換えるのもいいかな（笑）」…、このような感想をもらしておられました。

補講2. テーマ 「大津シンフォニックバンド第73回定期演奏会」 会場：びわ湖ホール

昨年度は本講枠で、今回は有志にての参加。にも関わらず26名の参加を得ました。この日のプログラムは、第1部「ロシアのクリスマス音楽」「アーデンの森のロザリンド」「ノートルダムの鐘」、そしてあの「オペラ座の怪人」。第2部は、全日本吹奏楽コンクール出場曲（金賞受賞）のあと、「千の松明 音絵巻 ～俵藤太大百足退治伝説～」「幻想 琵琶湖周航」「バレエ組曲 ロメオとジュリエット」「ぼくらのマーチ」など、いろんなイメージが湧き、これまでに出合ったシーンが目に浮かぶすばらしい曲ばかりでした。

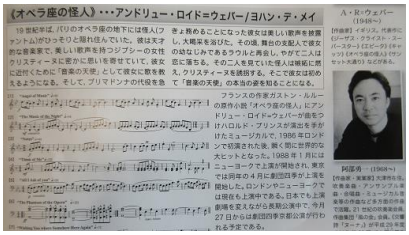
16回目の出場を金賞で飾る

第65回全日本吹奏楽コンクール

2017.12.24

定期演奏会実行委員会印刷係発行

指揮は、甲賀市に関係の深い常任指揮者中嶋氏と音楽監督森島氏の両名でした。同バンド理事長の鈴木氏にもご高配をいただき、記憶に残るクリスマスになりました。受付でいただいたプログラム冊子にもいろいろな工夫がほどこされ勉強になりました。参加者からは、「今回もよかった」「いい企画でした」の声をいただきました。



《オペラ座の怪人》・・・アンドリュー・ロイド＝ウェバー／ヨハン・テ・メイ

A・R・ウェバー（1948～）

阿部勇一（1968～）